

会報

第9回 ボランティアの会総会、講演会および懇親会開催

会長 在田一則

第9回ボランティアの会総会、講演会および懇親会が2011年5月27日(金)16時から総合博物館N308教室において行われました。以下に概要を報告します。総会議事の詳細については別紙、「報告」をご覧ください。

総会(16:00～16:40)

総会は20名が出席し、永山さんの司会で行われました。会長の挨拶の後、司会の永山さんから2010年度活動報告および2011年度活動計画案の提案があり、承認されました。2010年度の主な活動としては、4回の談話会、1回の博物館におしかけよう会、4回のボランティア・ニュース発行などがありました。

2011年度活動はこれまで通りの活動を積み重ねますが、談話会でお話を聞きたい講師、博物館におしかけよう会の訪問先などの希望をお知らせいただければ、事務局でアレンジいたします。ボランティア会員の談話会講師は大歓迎です。自薦、他薦の連絡をお待ちしています。なお、2011年度は、会員相互の情報交換の確実性と迅速性を増すために、現在の事務局体制を、各グループの代表者で構成する、代表者会議として位置づけることとし、6月中旬を目途に各グループの代表者を選んでもらうこととしました。代表者決定の後、新しい事務局体制については、改めてお知らせいたします。なお、在田一則会長およびボランティア・ニュース編集委員会の星野フサ・沼田勇美・永山 修・安田 正は留任となっています。

(注:その後、6月14日、第1回の代表者会議が開かれました。席上、会議を「グループ連絡会」、構成員を「連絡員」、と呼称することが決まりました。お知らせいたします。)



総会風景

講演会(16:45～18:15)

講師:津曲敏郎先生(総合博物館館長・大学院文学研究科教授)

演題:北方民族の唄とことば遊び

サハリンから大陸のアムール川流域、中国東北部、さらに北東アジア一帯にかけて「ツングース」と総称される人々が暮らしている。先生が、そのうちのいくつかについて、現地を踏査し、言語調査をされた。その折に聞くことのできたものを中心に、唄やことば遊びを人々の暮らしや風景とともに紹介していただきました。あわせて、北方少数民族言語の現状との保持への取組についてもお話していただきました。

懇親会(18:20～20:15)

津曲先生を囲み、12名が参加し、楽しく歓談しました。



4月からの館長就任を前に、果たして自分のような者に務まるのだろうか？と不安な気持ちに塞ぎがちだった3月下旬、知り合いの某館学芸員の方から、「館長さんが主人公の映画をやってますよ」という知らせをもらいました。

それは見ておこななくては、と久々の映画館に足を運び、観たのが「ようこそ、アムステルダム国立美術館へ」。レンブラントやフェルメールなど、日本でも人気の作品を多数擁する、世界屈指の美術館の大改修事業をめぐる顛末記です。

映画とは言っても、ほぼ完璧なドキュメンタリーで、出演者も館長から学芸員、市民まで、すべて役者ではなくて本人だそうです。それでいて、なかなかドラマチックな展開で、なぜそんな作品が撮れたかという、もともと改修工事の記録としてカメラを回していたからだとか。リニューアルのあかつきには、メイキング映像として改修の進展ぶりを誇らしく振り返るはずが、さまざまな軋轢やら思わぬ障害やらでいっこうに前に進まないドタバタ劇を克明に記録する破目になったというわけです。予告編が公式サイトから公開されていますので、詳しくはこちらから：<http://ams-museum.com/>

「市民のための美術館を」という理想に燃える館長の孤軍奮闘もむなしく、延期に次ぐ延期で、結局

総合博物館館長 津曲敏郎

思い半ばのまま館長の座を去る姿は、これから館長になろうという者には、ちょっと重たいものがありました。観終わって、春先の雪まじりの冷たい風の中を、暗い気持ちで帰路につきました。唯一の救いだったのは、困難な状況の中でも理想の展示や作品に寄せる思いを熱く語る学芸員や、いつの日か作品が日の目を見るときのために地道な修復作業に取り組む技術者の姿でした。それだけでなく、自分の職場に誇りをもつ警備員の姿も丁寧に描かれていました。改修計画に反対する市民団体さえ、自分たちの問題として館の行く末を真剣に考えていることの現れかもしれません。こうした多くの人たちが巨大美術館を支えているのだ、と気付かされたのは収穫でした。

私たちの総合博物館も、学生や教職員、一般市民のさまざまな期待を背負いながら、多くのボランティアやスタッフの熱意と努力で支えられています。その点では、館長が「孤軍奮闘」することはないかもしれませんが、もちろん解決すべき多くの問題があることも承知していますが、そうした問題点をきびしく指摘してくださった外部評価委員の皆さんから、「われわれは皆、北大総合博物館の応援団だ」と言っていたことは、大きな励みです。ボランティアの皆さんには言わば「応援団」兼「選手」の役割を引き続きお願いしたいと思います。館長として微力ではありますが、皆さんのご協力を得ながら、「ようこそ、北大総合博物館へ」と胸を張ってより多くの来館者を迎えられるよう、よりよい博物館づくりに向けて努力したいと思います。

特別寄稿

松村松年先生小伝④

大著「日本昆虫大図鑑」の出版

定年を間近に控えて、1931(昭和 6)年に出版した「日本昆虫大図鑑」(英文タイトル 6000 Illustrated Insects of Japan-Empire)ほど、良くも悪くも日本の昆虫学界で話題になった本はない。この本の中で松村先生はたった一人で、日本産の主要な目 (orders) に所属する 6 千種を超える種類を取り扱った。

この本が出版される数年前、東大の卒業生を中心に日本産の昆虫図鑑を北隆館から出版する計画が起こり、当時第一線で活躍していた昆虫学者に執筆を依頼していた。その頃には日本の研究レベルも向上して多くの昆虫研究者が輩出し、一人で研究する

昆虫ボランティア 久万田敏夫

範囲はある特定の昆虫群に限定されていて、松村先生のように一人ですべての昆虫類を対象に研究する時代ではなくなっていた。そのためこの図鑑の執筆陣から松村先生は完全にはずされていたのである。それを知った松村先生は、その計画に対抗して一人でそれ以上の大図鑑を出版しようと計画、2年たらずで原稿を書き上げ、北隆館図鑑より 1 年早く出版したのが表記の図鑑である。この松村図鑑では 6 千種を超える種類が扱われたのに対し、北隆館図鑑では 5 千種に満たない種類が搭載された。

一人で 6 千種もの種類をしかも短期間で仕上げた図鑑と、多数の専門家を糾合して時間をかけた図鑑

とでは、おのずから差があるのは当然である。そのため松村図鑑に対する批判は戦後になっても続いた。とくにこの図鑑の中で多くの新種が記載されたが、新種であると言及はどこにもなく、後に別の雑誌に新種であった種類の種名だけが発表されるなど、不備な点が多々含まれており、ここで発表された新種は無効であると主張する研究者もいる。またこれまでの新種に加え、この本で多数の新種を記載したため、「松村は新種メーカーで、新種を増やすためにこの本を出版したのであろう」と主張する研究者もいる。

しかし私の考えでは、自分が日本の昆虫学の第一人者と考えていた松村先生をはずした北隆館図鑑の編集陣に怒りを爆発させ、その怒りのエネルギーが松村図鑑を短期間に完成させた原動力のように思われる。一方この本の中で多数の新種が発表されたのは、当時北大に所蔵されていた標本の中で、いまだ種名が確定していない種類をも松村図鑑に含めようとした結果、多くの新名がつけられ新種が生まれることになったようである。とくに小蛾類に新種が多いことがそのことを語っているように思われる。当時は世界的に小蛾類の研究が遅れていて、英国の E. Meyrick 氏が一人で次々に世界から新種を発表していた時代で、松村先生もこの小蛾類の同定に苦慮していたようである。そのため、この図鑑を書くにあたり、いまだ同定の出来ない日本産の小蛾類にたいして新しい名前をつけて発表し、図鑑の内容を充実させようとしたのであろう。子供の頃から人一倍負けず嫌いの松村先生が、自分の大図鑑の内容を広げ、北隆館図鑑を凌駕するものにしたいと考えた結果、このように新種の大量生産にいたったのではなかろうか。松村先生の本領がここでも現れたことは間違いない。しかし一人でこれだけの種類を扱うのは今考えても到底無理があり、批判を浴びることになったのは当然であるが、今まで考えられてきたように新種の数を増やすことが目的ではなかったのである。ちなみに北隆館図鑑には松村先生の門下生たちも大勢参加しているが、これに対する先生からの横槍はなかったらしい。

和名の改定

動植物の名前には命名規約によって規定されている学名と、日本だけで通用する和名がある。前者は世界共通の名前で厳格にその命名方法が国際法によって規定されているが、後者には日本国内だけで通用する名前のためその規定はない。そのため日本産の動植物には一つの種類に様々な和名がつけられているが、今では一種の動植物には一つの標準和名が採用されることが一般的である。しかし日本人の生活と深い関係のある動植物には地方によ

って様々な名前があり、またブリなどのように成長につれて名前が変わるものもある。

昆虫学が日本に定着した頃には昆虫がそれほど厳密に区別される必要性がなかったため、和名が付けられていなかったり、名前を聞いただけではどの分類群に所属するのか判断できなかつたりした。たとえば、いまではギフチョウとヒメギフチョウに区別されているアゲハチョウ科の 2 種類も、かつて一くりにダンダラチョウと呼ばれていた。

松村先生がちょうどドイツ留学から帰国した頃、箕作佳吉や飯島魁ら東大の動物学の先生がたから、「昆虫類の和名が不統一で混乱しているため、秩序あるものに直すよう」命じられていた。1898(明治 36)年に出版した「日本昆虫学」の中で、松村先生は初めて和名の統一の成果を取り入れた。とくに松村先生が取り組んだグループは鱗翅目(チョウやガの仲間)で、科名にはチョウやガの接尾語をのこして、アゲハチョウ科、タテハチョウ科、ハマキガ科などとしたが、種名には科名についていたチョウやガを取り去り、カラスアゲハ、リンゴハマキなどと簡略化した和名に統一した。最初の頃はチョウやガを取り去ったため、名前を聞いただけではその虫がどの目に所属するのか、またチョウやガ以外の昆虫では最後のムシを取り去ったため、本当に昆虫の名前かどうかさえはつきりしないと批判されたりした。甲虫類のゾウムシ科の中にノミゾウムシと呼ばれる属がある。その幼虫は種々の植物の葉に潜って生活するが、成虫は太い後脚でノミのように大きく跳ねる習性がある。この中には発見者の名前が付けられて和名に「発見者+ノミゾウ」と名付けられるものが多く、ノミゾウが「呑み僧」を連想させるため、こんな命名はけしからんと揶揄する人まで現れた。しかし今では、松村先生の改定した和名が多くの人に採用されて標準和名として定着している。松村先生が採用した和名のなかには、学名や英名、ドイツ名などの翻訳から取り入れたものが多く含まれているが、日本で古くから使われていた名前も採用された。たとえばシャクガ科(Geometriidae)の幼虫は殆どすべて尺取り虫である。いわば反物を物差しで計るときのような歩き方をする。和名はこれに由来するが、学名の意味は「地面測定虫」である。もちろん種名は「…シャク」となって最後のがは取り払われた。なお昆虫の和名の最大の利点は多くの場合最後に「…カミキリ」のように科名で終わることである。このため和名だけでこの虫がどの科に所属するかが判断できることである。

ところで「チョウ」「ガ」「ハチ」「ハエ」「カ」「トンボ」など、日本古来の名前はどこから来たのか、その語源はよく判っていない。松村先生は古語の多くの昆虫の名前は「形」「感嘆詞」「色彩」などから来たもので

はないかと考えていたようである。たとえば「ハチ」は蜂に刺されたときの痛さから発する「アチツ」から、また「アリ」は食べ物に真っ黒にたかる様子を見て「アレ！」と驚きの声に由来するのではと考えた。「トンボ」は「飛ぶ棒」からではないかと考えていたようだが、先生自身も本当のところはよく判らないと述べている。

考えてみると、日本古来の動植物の名前は1音節から3音節くらいの短い言葉から出来ていて、多くの名前は2音節である。「アリ」「ハチ」「ウマ」「ウシ」「シカ」「ヘビ」などがそれである。古代の日本人はこれら非常に短い言葉で動植物を認識していたらしい。ちなみに動植物に名前をつけて区別認識するには、そ

れぞれの民族の生活上、その動植物がどれだけその民族とかかわりがあったかに関係しているらしい。「チョウ」と「ガ」を区別する言語はそれほど多くない。ネパール語ではチョウもガも区別せず「プタリ」である。日本では灯火に飛来するいやな「ガ」と、日中庭や森を優雅に飛ぶ「チョウ」ははっきり区別していた。しかし一方そのために日本では「チョウ」と「ガ」は分類学上まったく別のグループと考えられる傾向があり、よくどこが違うのかと聴かれることが多い。両方とも同じ鱗翅目に所属し、本質的な違いはないと説明してもなかなか判ってもらえない。

—つづく—

活動報告・他

陰のボランティア



私は仲間5名と一緒に冬季間(11月～4月)に植物標本整理をしている原グループメンバーの一人です。仲間の金上さんと黒田さんがボランティア・ニュース第2号と12号です。すでに原グループの紹介をしていますので、今回は博物館に顔は出さずに陰でボランティア活動をしている私が所属するもう1つのグループを紹介します。

北大エコキャンパス読本-植物編-をご覧ください。裏表紙に協力:「札幌花散歩の会」と記載されているグループです。このグループの活動内容は、夏季(4月～10月)に北大キャンパスをくまなく歩き、植物の分布とフェノロジー(開花・結実期)を調査することです。フィールドでの活動ですので、高橋先生との打ち合わせ以外には博物

植物ボランティア 与那覇モト子

館には立寄らず、「北大調査」の大きな黄色のゼッケンを付けてひたすら植物を観察して回っています。

2001年4月19日から、基本的に毎月上中下旬の3回、毎回10人以上で広いキャンパス内を3つの班に分かれて調査しており、2001年は12回、2002年27回(内標本貼4回)、2003年8回、2004年20回(内標本貼3回)、2007年17回、2009年16回行ないました。

北大キャンパスには在来植物、帰化植物、外国からの移植種、温帯系の移植種、園芸種、薬用植物園からの逃げ出し、研究用に植えられたものなど様々な植物があふれ、毎回新発見の連続で興味津々、多くの植物との出会いはとても勉強になります。その上、データ報告や情報交換などでメールやパソコン、デジカメ操作なども向上しました。都会にあるオアシスのような植生豊かな北大キャンパスを見て回れることを、皆嬉しく思いながら楽しく活動しています。

津波被害 岩手県陸前高田市博物館蔵 標本修復のお手伝い

全国から救いの手 —北大でも昆虫修復のお手伝い—

東日本大震災に会われた皆さまには心からお見舞い申し上げます。

今回の大震災では人的、物的被害が過去に例がない程大きくて、被災地から離れた私たちも何か出来ることはないかと、義援金を送った人がたくさんいることと思います。

私たちに出来ることもありました。5月11日昆虫メーリングリストで大原先生からレスキューの依頼が

昆虫ボランティア 永山 修

ありました。

陸前高田市博物館でたくさんの標本や資料が被害を受けたとのこと。昆虫は海水を抜くために5%のアルコール漬けにされ、救出を待っていました。大学院生さんを中心としたボランティアが標本を綿に乗せ、乾燥したら紙台紙に貼り、ピンを刺し、ラベルを付けるという作業ですが、通常の昆虫標本よりも壊れやすくなっており、慎重にも慎重を期しての作業が

求められました。ラベルは塩水につかってふやけたり、にじんだりして読みづらくなっており、読み取るのも一苦労。緊急呼びかけに毎日たくさんのボランティアが手伝いをしました。これらの活動は5月18日北海道新聞に昆虫のレスキューの様子が写真入りで掲載されました。大原先生によると、レスキューは昆虫担当学芸員協議会メーリングリストで依頼された

植物標本修復のお手伝い

被災した陸前高田市博物館の植物標本は、全国の多くの博物館関係者が支援の手を挙げ、情報交換をしながら救出作業を進めています。道内でも北大総合博物館のほか、数か所が引き受けてレスキューに参加しております。高橋先生から植物標本の修復依頼が伝えられ、届けられた植物標本の復元作業を現在行っているところです。

作業内容は、海水で被災した標本をアルコールで消毒後、大きなトレイに真水を入れて15分間浸けておきます。水を入れ替えてこの作業を更に2回繰り返したあと、標本の形を整えてラベルと一緒に新

そうで、全国の多くの博物館関係者が支援の手を挙げました。

博物館の標本はその土地で生きてきた生物の証し。二度と同じものを作ることが出来ません。一部とはいえその手助けが出来たことをボランティアとして嬉しく思っています。

植物ボランティア 吉中弘介・星野フサ

間紙に挟み乾燥機に入れます。傷んでいる標本も多く細心の注意が必要です。

作業の様子は博物館のHPからもご覧になれます。また先日5月29日の夕方、NHKテレビで報道されました。救出作業はまだ道半ばですが、陸前高田市博物館で大切に保管されてきた植物標本の救出に携わることができ、ボランティアの一員として大変貴重な経験ができました。おわりに、陸前高田市博物館の亡くなられた多くの職員の方々のご冥福をお祈りします。

「シベリア抑留」とはなんであったろうか？

ー日本最後の樺太戦と私の場合ー (その2/2)

(注:本ニュース20号の地図を参考にしてください)

ポルトワニノ港に上陸してからトラックでトムニ川沿いを北へ。果てしない白樺林の中の砂利道を行き先さえも分からず、未来の事も分からず不安の中で大きな丸太作りの家に着いた。横の連中と繋がり弱いただの500名集団。まだ8月末というのにもう盆花が散り始める気候の中で切れの黒パンと一杯のカーシャ(おかゆ)の生活が始まった。将来への不安、不信、自然の厳しさなどすべてが見通しが立てられるものがなかった。

やがて厚い作業服が与えられ強制労働に出されることになったがそれはトラックからの砂利下ろしや焚き木伐採、住宅修理などであったがなんのためにこんなことをするのかは分からずまいの毎日であった。戦勝国側のソ連も極端な物資不足。日本兵の腕時計やバンドの強奪もしばしばであり、その度に私は取り返しを申し出る出番があった。そのうちに日本人用食糧にごまかしのあることに気がついた。しかし、打つ術がなく、打ちつづく苦悶と不安の中でついに重大事件が真冬に起こった。

それは自殺者の出現であった。真冬は零下46度まで下がったが屋外労働は零下40度まで働かされた。半年間は夜の長い酷寒の地、故郷を思い親を

化石ボランティア 石橋七郎

偲べば死を思うようになるのも当然かも知れなかったが、私にはなんとしてでも帰れる日を待って返してやりたい一心であった。まもなく自殺者は二人になった。この時私は食糧のごまかしもあると分かったがそんな所にソ連側の若い検察官の査察が入った。この時、私が訴えた通りやはり横流しがあり、ソ連側従事者への強烈な叱責が一晩中行われた。不足分の食糧補充はすぐ行われたがその3日後、私は「休息」と称して別のコロナ(収容所)へ連行された。

私はこの事件後500名の集団をどうにかして「助け合う集団」、「はげまし合う集団」に切り替えるために、軍隊組織ではない組織づくりの必要性を深刻に考えるようになる始まりであった。

これらの事は初めに入ったマンガフト第一コロナでの出来事であったが連日の活動で全く疲れ果て熟睡している間に衣類、書類すべてを盗まれてしまい探しようがなかった。「暫く休養させる」という名目でオーペー(休息)コロナへ。実際の所は軟禁であったが、偶然同情心のあるロシア人女性看護師が居り体力回復とロシア語会話もいくらか覚えられる幸いがあった。危険人物視されていた私は6ヶ月後さらに北にある第5コロナへ。新参者なのに、ここでもすぐ部隊代表者をみんなから任されたが外出は禁止、

軟禁続きだった。状況が一変したのは当時のソ連憲法第9条に「働かざる者は食うべからず……」とあることを私の方から説いてからだ。ノルマ部長のミハイルに取り入って日本人500名の氏名と、達成ノルマの記入を毎日私が手伝うことになった事だった。勿論いかにごまかすかは最大のテクニクであったが……。

冬は厳冬、夏はブヨ、蚊、蠅、南京虫等の猛襲、そして目標の分からない重労働であったが湿地帯に繁るアブラナ科植物(オランダガラシ:クレソン)や季節になるとそれを食べさせ、俎上してくる鮭やニシン、手づかみできる位の壮観さであった。

抑留2年目に私は一策を考え出し最も安心できる兵を4名ほど秘かに集め、これまでの反ソ的言動を突然止めいかにも協調したように騙しをすること、それに楽団づくりや盆踊りなどみんなのできることを始めることを相談した。本当のことは全く出さずにしておこうということでもまず作ったのがカチューシャ楽団であった。やがて日曜毎の楽しみになり僅かのゆとりができた。

抑留2年目は反軍闘争も起こり、ソ連側の思想教育もあったが表面上わが隊の中は平穩に過ごしていた。ただ、虚弱者はやはりオーパー収容所に連れていかれたが後日考えると労働に耐えられない者をまず集めて日本に送り返す準備をしたのかと思われる。それにしてもなん万という死者をかの地に出したことはどうしても許しがたい。

シベリア抑留といえば強制労働、密告、思想教育、極寒など厭な話ばかりだが、帰国の夢を捨てず互いに励まし、教え、助け合い、健康維持しながら時を待つ、そして相手を思いやることが総てであった。

5年目の夏、月日は忘れたが、私は突然単身コムソモリスクへ。ここで大河アムールを見、チョウザメの捕獲などを見て驚いたが再び白樺林の中を西へ西へと連れて行かれついにハバロフスクで下ろされた。そこは第16コロナであったが、コルホーズ(集団農場)地帯であり数名の日本兵もいた。ここで愛新

覚羅傳傑氏とも出会い、色々な相談も受けたが中国へ帰ることを奨めた。また、松岡洋祐元外相の3男震吾氏とも出会い、いろいろ有名人と話し合う機会もあった。それまでの苦労の中でいつも誠意だけは保ち続けたつもりだった。

集団農場では向こうが見えぬほど続くキャベツ畠で除草や整理の軽作業であったが、みんなで人目を忍んで盗み食い合った生キャベツの美味しかったこと、僅かながら手当て金まで出されたことは今だに不思議である。

在ソ5年間、古いロシア語を知っている日本人...それは日本の諜報員ではないかと疑われ、帰国してからはロシア語ができて活動していた者はソ連共産党同調者ではないか...夢にまで見た日本に帰ってから数年公安警察、GHQの監視下に置かれ、軍のトップに居たからか、C級戦犯の1人とされ、公職追放となり全財産もなくなりましたが、帰国5ヶ月前に病死した父を看病しながら私の帰国を待っていてくれた妻を想うと泣いてもおれなかった。転々と職を替えながらたどりついたのが中学校教師であった。なにも分からない初任者の私にとって、あのシベリアでの集団を、協力小集団作りによって自動的に活動するようにした経験をいつも思い出していた。

雑多な小さな生徒の中でもみな特技がある。歌、指揮、料理、花壇、表紙描き、書、マンガ描きなど機会があればそれを発表させてみた。結果はあの時と同じで学習意欲も成績も格段の光りがでてきた。

つらかったシベリアの5年間...私にとっては別の意味で「死と生とがまんの大きな人生大学」であったかも知れない。ただ言えることは私を支えてくれた将兵たちがいたから出来たのであり、死んだ戦友にも深々と頭を下げたい。私を待ち続けて病死した亡父、泣き乍ら無一文になって帰国した私を支え続けてくれた亡妻に、今、初めて書いたこの実話を献げたい。また、たくさんの人々の名をあげたいがここでは省略します。(平成22年11月8日記)

- * ボランティア・ニュース21号をお届けします。発行が予定日から大幅に遅れてしまいました。お詫びします。
- * ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。
- * ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac>

- * ボランティア控室がN302からN314Aに移動します。時期は未定です。



ボランティア・ニュース

- ◆編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、永山、安田)
- ◆発行日:2011年6月1日
- ◆連絡先
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel: 011-706-4706